

## CASE3 すずらん薬局音威子府店 (北海道中川郡音威子府村)

人口700人切った村で唯一の薬局  
物販・在宅も手掛け採算確保に奮闘

北海道北部に位置する音威子府村。道内有数の豪雪地帯で、冬場の平均気温はマイナス6℃を下回る。そばなど農業が基幹産業の地域で、高齢化率は30%少々だが、人口は右肩下がりで減り続け今年5月末現在679人。その村立診療所に隣接し、処方箋を一手に引き受けているのが、すずらん薬局音威子府店だ。

ドラッグストアの機能も  
在宅医療は一步ずつ展開

札幌・小樽など道内に8店舗を持つメディカルファイブ株式会社が、2017年に買収して現在も経営。管理薬剤師1人と事務職員3人で切り盛りし

ている。「過疎地から医療提供の、そして雇用の場をなくしたくなかった。採算はぎりぎり」と、代表取締役の木崎啓介氏は話す。同氏は、道東の北見市出身で薬剤師でもある。

応需している処方箋は1日30枚ほど。大半は内科系のだが、村立診療所では非常勤医が整形外科や眼科・皮膚科も診療しており、幅広い処方箋が持ち込まれる。管理薬剤師の佐藤義人氏は、「当初、各先生の特徴がわからず苦労したが、次第に様々な薬局で積んできた経験が生かせるようになった」と話す。

調剤以外に、OTCや衛生材料、食料品などの物販にも力を入れている。「売れ筋はオムツ。減塩の即席みそ汁も人気がある。しょうが湯やアメもよく売れる」(佐藤氏)。コロナ禍に際し、マスクのほか非接触型の電子体温計やアルコール消毒用品も置き、地域との結び付きを深めることができたという。音威子府店の売上高のうち、物販は5%ほどを占めている。

在宅医療の訪問薬剤管理指導



音威子府店管理薬剤師の佐藤義人氏

も、現在3人に提供している。村立診療所は在宅医療を手掛けておらずケアマネジャーからの紹介もない中、佐藤氏が自分でまず訪問薬剤管理指導の対象となる患者を2人見つけ出した。村立診療所に加え名寄市や旭川市の病院にも通っている患者がおり、在宅で薬の管理を行うニーズがあった。実績を見た村の保健センターから相談を持ち掛けられ、3人目の患者を紹介されただけでなく対象患者が10人以上いることも判明した。

進みやすい関係者間の理解  
電子処方箋対応も視野に

オンライン診療を受けている患者がいることもわかった。そのため、来年から始まる電子処方箋への対応も念頭にある。木崎氏は、「居住地に関係なく受診できるのがオンライン診療のメリット。雪で地元から出られない場合もあり、薬局も対応体制を考える必要がある」と話す。

音威子府村では、役場や診療

所、保健センターなどの関係機関が、徒歩1、2分の範囲にコンパクトにまとまっている。「互いに理解しやすい環境にあり、つながりを深められればフレイル(虚弱)防止や予防医療でも役に立てると思う」と佐藤氏。

ただ、村にいる薬剤師は佐藤氏1人。薬局の2階に住み込んで携帯電話を常に所持し、いつも気を張り詰めているという。

社長の木崎氏は、「急な休みに備えて事務職員は多めに配置しているが、薬剤師は見つけるのが難しい。オフの日には札幌から代替りの薬剤師を派遣し、休めるようにしている」と話す。

すずらん薬局音威子府店は、処方箋の集中率は96%。特例で最も高い調剤基本料1が算定できる施設基準の「厚生労働大臣が定める地域」には含まれ

ていないため、調剤報酬面で過疎地にある恩恵は受けられない。こうした制度に不満はあるものの、木崎氏は、「地方の医療を守っていくという使命感を持ち、人と人とのつながりを大事にすることで薬局としての存在価値を發揮したい。地域おこし・むらづくりの面でも貢献していきたい」と過疎地での薬局経営に意欲を見せている。

## VOICE

薬局は存亡の瀬戸際  
役割の見える化で国民を味方に

認定NPO法人 ささあい医療人権センター COML 理事長 山口 育子 氏



リフィル処方箋、電子処方箋の導入をはじめ、薬局・薬剤師をめぐるのは、矢継ぎ早に制度が変わっています。患者・利用者はなかなか変更についていていません。「健康サポート薬局」「かかりつけ薬局」「地域連携薬局」「専門医療機関連携薬局」と看板の種類が増えました。制度の周知も必要ですが、それぞれの薬局自身が役割を発信してくれなければ利用者には違いがわかりません。

そもそも患者には薬剤師の仕事がよく見えていません。薬剤師の仕事の大部分はバックヤードでの作業なので、患者から見ると、薬剤師は「処方箋を出すとそのお薬を渡してくれる人」というイメージしかないのです。

薬局のあり方については、私も委員を務めた厚生科学審議会医薬品医療機器制度部会が2018年に公表した「とりまとめ」には、「医薬分業のメリットを患者も多職種も実感していない」「対物業務だけで業が成り立っていて、多くの薬剤師・薬局には患者や他の職種から意義を理解されていないという危機感がない」といった厳しい指摘が明記されています。

薬剤師の基本的な役割は、薬剤情報提供、薬歴管理、疑義照会、残薬整理、そして薬剤師法が改正されて加わった服薬期間中のフォローアップだと私は考えています。薬剤師の仕事は窓口でお薬を渡して終わりではなく、そこから薬物治療の始まりであり、薬剤師の本分だということです。あまりにも当然のようですが、実際にはできていない現状があるために、法律に加筆されることになりました。しかし、薬局薬剤師が入手する

臨床情報はいまだに処方箋だけで、病名も知られずに「薬学的知見に基づく管理・指導」を求められているわけです。

一部の病院は検査値を処方箋に記載するようになりましたが、薬局の薬剤師に聞くと、まだ多くは「医療機関が出してくれない」と言います。退院時カンファレンスに出ている薬剤師は少数で、出ていないのは「呼ばれないから」と言います。なぜ薬局側から「検査値、病状の情報を教えてください」「カンファレンスに参加させてください」と求めないのでしょうか。薬剤師の本領を發揮するには臨床情報の共有が不可欠なはずですが。

病院薬剤師は病棟業務に就いて、電子カルテで臨床情報を共有して医師に処方提案をするようになっていきます。多職種チームの中で、薬物治療に欠かせない専門職として患者からも存在が見えてきています。一方、薬局薬剤師は二極分化し始めています。依然として調剤だけしている薬局が多い中で、地域に出かけ、地域に密着して前向きな取り組みをしている薬局が出てきています。

一連の制度改正でも、調剤報酬の改定でも、対物業務をスリム化して対人業務へのシフトができない薬局、調剤だけしかしていない薬局は淘汰される流れが明確になってきています。多くの薬局は存亡の瀬戸際にあると思います。それでも動かない薬局が多すぎます。薬局・薬剤師は役割の見える化を進め、国民を味方に

して、本来の薬局の役割を發揮してほしいと思います。(談)

**すずらん薬局概要** 2022年6月現在  
メディカルファイブ株式会社  
代表取締役 木崎啓介  
●設立 1999年2月  
●社員数 47人(うち薬剤師20人)  
●店舗 道央エリア(札幌市内5、小樽市1)、道北エリア(枝幸郡1、中川郡1)で計8店舗(ほかに小樽市に関連薬局1店舗)



音威子府村  
村のキャッチコピーは「北海道で一番小さな村」



局内の一角では村民手作りのマスクや小物入れ、陶器などの展示・販売もしている